

第三百四十三回 青葉会

平成二十六年十月二十三日(木)

午後六時〜九時

丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生(入院中)

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 後藤保明 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯 星田啓子
山崎亜也 山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 小川恭延 久米五郎太 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明
古田昇 宮内規雄 渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 川口孤舟 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明
村田くに子 山崎青史 山本三恵

《互選句》

八点

秋澄むや沖を二艘の帆曳き船

昇 (堅・ゆ・灯・允・正・啓・天・三)

七点

壬生寺に鼓の響き秋の暮

保明 (堅・弘・灯・隆・正・く・天)

☆ 煙立つ刈田を貨車の影走る

一灯 (万・忠・敏・ゆ・隆・啓・く)

(☆↓「煙立つ刈田を貨車の影走り」下五を流動的にしたい)

六点

☆ 番傘の朱色眩しき秋時雨

そらお (万・猛・保・允・正・天)

(正：中七↓「朱色が滲む」では?)

五点

べつたら市香りが昔を連れ戻し

保明 (堅・紀・孤・敏・啓)

(☆↓「香りから過去甦りべつたら市」)

四点

☆ ボヘミアの地平に没(い)り日鳥渡る(ピルゼン)

一灯 (万・紀・孤・敏・允)

秋暑し人形遣ひの澄まし顔

紀久男 (忠・保・千・天)

志ん馬一周忌

☆ 逝く秋や志ん朝譲りの芸惜しむ

全 (万・保・敏・く)

老犬の残暑をすでに懐しむ

弘子 (忠・亜・青・三)

(☆↓「残暑をば懐かしさうに犬老いし」)

☆ 試食する囃み音高しべつたら市

保明 (万・千・灯・青)

☆ 望めども拉致の彼方は霧深し

健介 (万・紀・猛・忠)

☆ うららかやホルスタインの甘え鳴き

一灯 (万・保・隆・啓)

☆ 新米も軟らかく焚く母の膳

啓子 (万・孤・千・天)

(☆：「も」の持つ力がよく發揮されている)

三点

☆ 爽涼や出雲に集ふ神と人

盛雄 (万・紀・猛・孤)

紅葉を覆ひて止みし火山灰

そらお (紀・千・亜)

☆ 爽やかな父生き写し勘九郎

紀久男 (万・ゆ・く)

中村小山三94歳現役

☆ 野菊咲く弟子一筋の女形かな

全 (万・忠・弘)

☆ 秋晴れや蟄居せる身を解き放つ

恭延 (万・弘・龍)

☆ 枕辺の蜜柑病人(やみびと)立ちて見せ

弘子 (ゆ・啓・三)

(☆：「病人」↓「病む人」では如何)

☆ 朝刊と金木犀とハーブテイ(新感覚)

堂哉 (万・孤・亜)

☆ 秋風を切るオートバイ少女来る

ゆたか (龍・灯・隆)

(☆↓「少女着く秋風を切るオートバイ」)

☆ 目で登るゴシックの塔古都の月

一灯 (弘・正・亜)

(☆↓「古都の月ゴシックの塔(目で登り)」)

☆ 追憶のまた巡り来て金木犀

啓子 (堅・孤・允)

(☆↓中七「巡りめぐりて」)

☆ 秋草を生花展で見る都会

全 (龍・ゆ・正)

二点

☆ 虫の音が何故かそぐわぬ日本晴

保明 (万・紀)

朝顔の枯蔓垣に種成して

(☆：下五の語法にもう一工夫欲しい)

弘子 (千・三)

困炉裏端まんずまんずと芋の汁

全 (堅・龍)

☆ 穴惑ひねぐらは豪雨に無事なるや

健介 (万・忠)

天高し総合職女子颯爽と

恵洲 (く・亜)

(☆：三段切れにならぬように「颯爽と総合職女子天高し」)

角の立つこの世に月は円く欠け

ゆたか (堅・敏)

ロマの唄洩るる夜霧の石畳(ブラハ)

一灯 (紀・允)

☆ 姿見は巾狭きかな着ぶくれる

正明 (万・天)

(☆↓「姿見の巾の狭さよ着ぶくれて」)

秋時雨今宵は読書抄らず

規雄 (孤・龍)

(☆↓「秋しぐれ今宵は読書抄らず」)

☆ 古色帯ぶ甕を選びてちちろ飼ふ

亜也 (万・灯)

(☆ちちろの為に古色の甕を選ぶとは何と詩的な会いか!! ↓「ちちろ飼ふ古色を帯びし甕を選び」)

☆ 秋鯖の揚地を問へば濟州(チェジコ)とやら

全 (万・正)

祖母想ふ茶巾しぼりの栗の味

天牛 (紀・保)

(☆：上五↓「祖母恋し」)

生と死は吾の知らぬこと草の絮(わた)

盛雄 (弘・三)

(☆↓「生と死を知り得ぬ吾ら草の絮」)

春夏秋手塩にかけし菊折れる

全 (龍・ゆ)

蠅螂の振り向く愛嬌児ら歎声

紀久男 (啓)

秋刀魚食ふ遠き旅路をしのびつつ

猛 (允)

長き夜も番組追っかけ更けゆきぬ

全 (青)

(☆↓「番組を追っかけ更ける夜長し」)

女房より看護婦優し夏の風邪

忠彦 (隆)

馬肥ゆる蒙古の怪童暴れ場所

全 (猛)

山粧ふ峰は瞬時に灰地獄

全 (敏)

豊作と多めに届く今年米

全 (灯)

新米や少し多目に水を入れ

五郎太 (青)

稲束匂ふ出羽を挙げての文化祭

全 (紀)

台風過藍色深む近江の海(さき)

保明 (猛)

☆ 柚釜の尻をたつぶり焼き焦す

弘子 (万)

金婚式間近の林檎半顆づつ

恵洲 (青)

沢蟹をせがむ幼子紅葉狩

堂哉 (隆)

☆ 出囃子の三味が高座に秋の寄席

ゆたか (万)

パンケーキ今晩からは羽根布団

正明 (紀)

職退きし後の人生爽やかに

昇 (く)

野分すぎ萩散り敷くや石畳(季重なり)

啓子 (千)

☆ 朝方の蒲団の温み抜け出せず

規雄 (万)

かまきりの泰然自若道塞ぐ

亜也 (保)

秋めけばシュー・ア・ラ・クレーム売り始む

天牛 (垂)

神さまは無慈悲な方よ秋火山

全 (青)

泉州の旅でもらひし渡蟹

全 (三)

●次回青葉会

十一月二十七日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

十二月十八日(木) 予定

平成二十六年十月句会報

一 万里子先生御入院による選者御辞退後の初めての句会

本社ビル玄閣での事故の為、ビル管理の丸紅サービス及び総務部の担当者に句会場に来て貰い、経緯及び社内報告の確認をしてから開始。

見舞いにかれた弘子さんの報告（手術成功、術後も順調）、出雲大社の挙式、藪蕎麦の再開、ふるさと大使（天牛さん、ゆたかさん）等々話題にし乍ら、いつもの寄贈品：弘子さんのハローイン菓子（花園万頭）、啓子さんの純米原酒「男山」（旭川）、亜也さんの山麩純米ひやおろし「手取川」（石川）、忠彦さんの純米・生酛「大七」（二本松）、小生の純米「親父の小言」（浪江町の鈴木酒造が山形の長井蔵で酒造）を賞味。

猛さんの快調な披露で御覧のように昇さん、保明さん、一灯さんが高得点。早や目に切り上げて、先生への寄書。

二 関係者近詠

草田男の墓辺秋澄み深呼吸

万里子

奈良へ行くついでの京都油照り

丹野敦雄

師の墓へ径いく筋秋深み

全

父の日の拙き父の手品かな

今井聖選

秋うらら亡師の健脚偲ぶ旅

全

「俳句」 11月号

全

よちよちと杖のちいぢへ秋日和

全

「俳句」 11月号 伊藤敬子選（秀逸）

全

秋暑し女ばかりの読書会

眞希子

星月夜阿闍梨の駆けしけもの道

襄（孤舟）

百号描き上げ九十路へと秋のぼら

全

名月やわが心鏡に翳りなし

全

小さき国を禍福に染めて秋出水

全

満月の山湖に浮かぶ詩の舟

全

大粒のぶだう一粒法事膳

全

綿菓子の膨れ清夜の村芝居

全

白玉の息継ぐごとくふはと浮く

弘子

「俳句」 11月号 『俳人スポットライト』

夏夜の駆走るや明日は六十三

全

「俳句」 11月号 『俳人スポットライト』

薄紙めくハンカチやんはり拒絶する

全

酒の火照り醒ますべく外へ星月夜

允章

さちさちや一駅先へ転院さす

全

谷間（あい）の小さき棚田や豊の秋

全

洪水の跡に子探す親の影

恭延

夢殿へ色なき風の渡るなり

全

金魚玉スカイツリーが折れてゐる

青史

知つてゐる星見つからず星月夜

恵洲

ただならぬ世のただならぬ首都の電

全

先刻引きし字をまた引くや秋灯下

全

蟬穴は埴輪のまなこ渡来系

全

「俳句」 11月号 『俳人スポットライト』

「萬緑」 十一月号

全

相輪のにぶき光や鳥渡る

允章

太糸のセーターが知る遠い日よ

盛雄

石庭に対ひてをれば小鳥くる

全

名月や災禍の地にも隔てなく

健介

初しぐれ九十九折なる柳生道

全

太棹に乗りご機嫌の村芝居

紀久男

しみじみと十日の菊をいとほしみ

青史

信うすき原子炉はるか鷹渡る

盛雄

十三夜まだ落ちきらぬ砂時計

全

信なくば友の甲斐なし破蓮

紀久男

「きさらぎ句会」 10月

三 句会翌日、東大病院の先生お見舞に弘子さんと伺いました。頂度、眞希子さんも来ておられま

した。早や歩行訓練も始めておられ、リハビリ意欲満々。すこぶるお元気そうなのに驚きました。昨夕句会出席者の寄書をお渡ししました。

弘子さん持参の萬緑の皆様の寄書（和綴の句帳）と併せて全部読み上げて喜んでおられ、感謝もされました。お元気に甘えて選句をお願いしましたら快諾され、翌々日郵便拝受しました。御覧のように、ほぼ全句の御高評と添削を頂いております。

10月末、三鷹のリハビリ病院に移られ、お見舞された弘子さんによるとリハビリに御精励の由です。予想以上に御回復が早まりそうな気配です。

平成二十六年十一月十二日

紀久男記